俳諧
拾遺清水記

宝暦七年
(1757)

序

武陵の水日々の里と云ふ人家
よりおもむきて
を領さるる墨客遊子の閑
秀楼山やまの秋いとも
その窓居この季候もむつをおもむ
不ふるひさる年に換の宮と云ふる
ちうとてあるさ

青秋序

造

申ばよりうらの里にあそぶ

をりのおもうをしるくやもかの序

ぬるむ其ことのまゝやうに頌て

寓意よ事をそめ侍る

丁丑之文月

ヘ、赤心

俳諧
拾遺 清水記

二とせの三とせまえ武江のかねうらの
さとに雨降ふかうもふかずもふりたる
ひるつかた勧請の社有
おほん神主其ほのよふにてなかうの
やしろの前成ける備まめやかにいとも
めでたきまつりなれはなりぬべしよ

野中乃井

江戸庵のに云ふ所の説かよ柿本といふ寺女
法名(まことの)なれば其の名をおもひ出尼
なりてこの井のほとりに住(すみ)ける故に
名とせしとかや

いつもより水の少なくて人手かをこゝろみて
幸(さいわい)ありやなしやとうかゞふ

あひおもふ中(なか)の井戸乃水なれば
きてのむ人もおほくいとゞ

菊屋庄兵衛の子云ふ柿本の井ことゝ云ふ時
厂側(かたわら)に大溝(おほみぞ)あり南北方(みなみきたかた)にあり其水清
水(しみづ)にして町屋(まちや)のこゝろよきを

梨の木の清水

摸摩印(もまのしるし)

古今和歌集雑歌上

よゝの人もこゝに

清水

嵐雪
未陌
許六
一笑 賀
定行
盤谷
一楓
梅披 盲人

尚白
一晶
荷兮
麥阿
澤北
柵陳
麥林
貞佐
其角

雨中花の八はよろめく風にかかるを

すゝや 岩間こかゝりてとくとく 其角

雪依公 独吟

月見やて酒のこるうきの 亀

ある人大きなる盃しかハ坐中にまわしてのむを

清水哉 雪ふる白う 雨中かな 〃

同

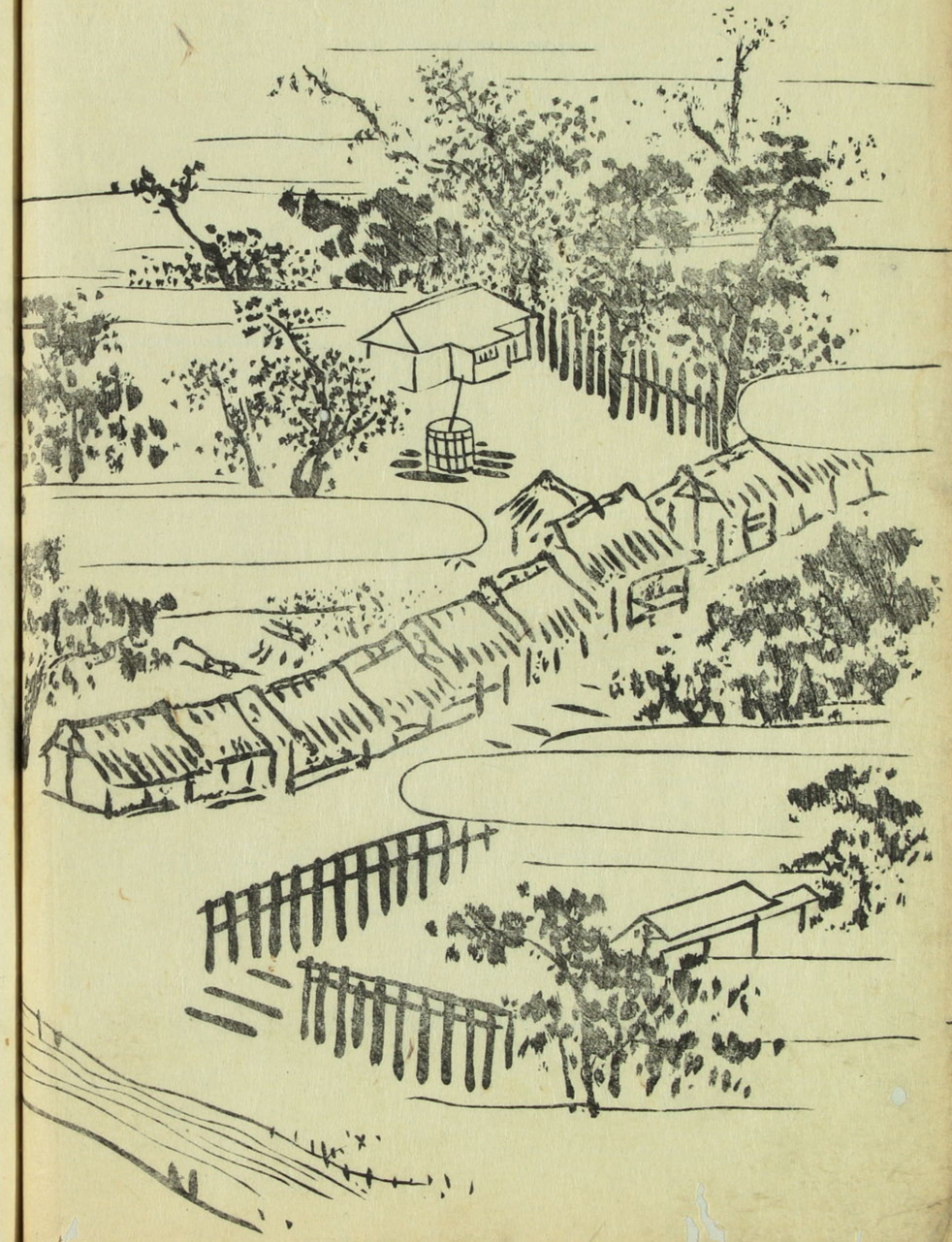
痩馬の仲 寒うきものゝ
こゝろもとなく
人や此ばしんこる残
寒の代や人家中
洗ます踏み 馴像ぬ清水哉 丹鳳

一節ハ歩ほゝ水の流る 〃 秀谷

新式なる二郎兵衛清水新也後と云てる
百人一首を絵ハ新るうりと云事をもと
手水鉢の仏者もの
くもの 絲ありともなすぬ清の 〃 百菴

ひきもまわるものゝ
清きをそこうる 〃 玉蛾
日中歩め 谷中村清水新兵衛の碑 塵亘

野中之清水



こゝまでも清水もとめて

五嚢子

筧そゝぐ清水薫りて

龍眠子

飲みて知る清水なるべし

、

玉江

名も知れる志賀の都

市栖

老僧も汲まぬ清水哉

氏野

我を汲流れ浅香清水哉

今鳳

杉ながら苔深く清水哉

春籐

我影を柳もうれる清水哉

太國
六窓
桐 朋改
盧
深魚
ト室
東波
陸馬
五雲

令堂
白桐
屯藏
鯉冬
畔水
丁口
六器
魚明
通車

是宮ハ今ノ宝井
寺ノ事ヲ云ヒ来ル

草乃葉千世ふるまでも
不動平清水城よなやのう夜
寒られとも駒の
神饌平一面ハ
山伏の呪ハ
場私ヲ
清水代ノ
ノ
ノ
ノ

三井
梅幸
好玄
平久
杉暁
半夫
笠子
巨撰
少長

水くき次すむ
ノ
ノ
ノ

朱仲
再加
吉門
栖雁
鶏口
春来

職人一統会之題

其露

石菜花

其角
嵐雪

許六　ゆふ汐の海見へ行くやうてん
席令　水の外内裏ぼんぼりともるてん
白雲　おぼつかの白雲沸きこゝろてん
母樂　きりのきれ行くやうなみのとこゝろてん
我兄　をぢ家すゝ拂ひもまくとこゝろてん
玉砂　一節といふ一節毎に石菖花
南部湖雲　長噌の法華にひゞせこゝろ太
紫筍　うめもとゞきと云ふ　沸ぬへし

貞佐　西門をゆく人のさゝやきしこゝろてん
仝　生れ子見ん我わすれ草後てん
丶　法人年方行くんや　心太
丶　きりとおもはれハとこゝろてん
丶　松まつをゝ高みなり石菖花
超波　まる川茂如て落すれとこゝろてん

丶

鷲沸きを三輪のきやこゝろてん

道雲子

直ある今日すのさと　秀谷

最上のけふ水平角なり　丹鳳

おもさハ法の雪なれや　暁翁

公事無き法の雪ハそも花　東爲

駕ごよ急ぎ路々ふる雪　諫子

駒う世や　梅やよふ　丹志

六角を移しの雪とふる雪　市栖

山行すまんて　味を行まん　買井

さるみ

秀谷

楚雲

雲儀

南樓

隹節

連砂

青梁

梅道

白抄

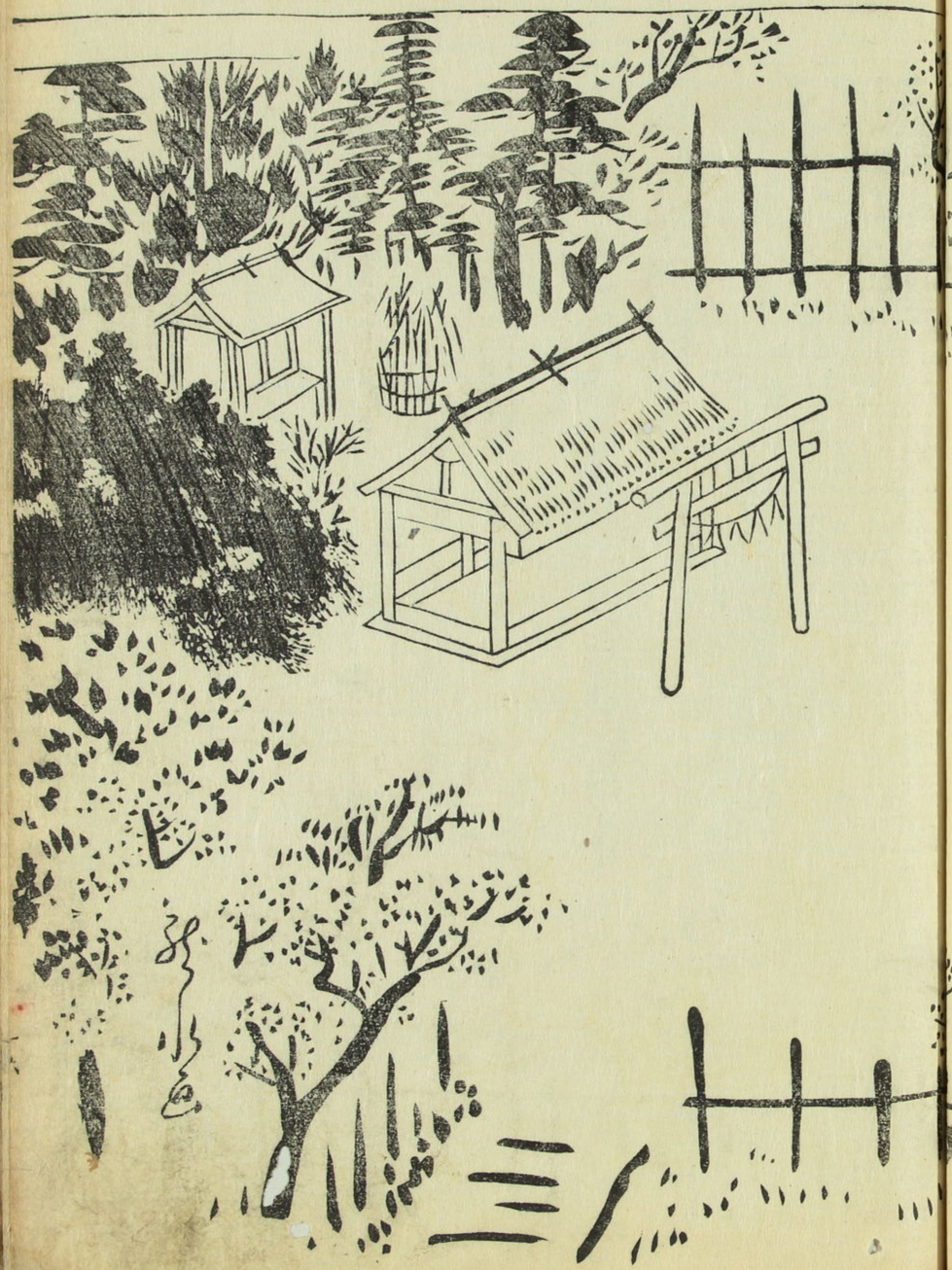
律砂

沽國

春武

熊文
鹿文
何江
魚樂
柄車
和考
天車

藤已
殖霍
八十翁 寥和
樸川
由林
圖大
露牙



櫻乃宮

奉納歌仙

ふるさとを白木造りや山桜　九花房丹鳳
末遠き行く春日うらうらし　秀谷
みやまおろの名に俗蝿の足音て　紀逸
菜殻乃水に花を流すも　市栖
七夕乃男手きらくと筆の月　買升
掘下まゝ新のうち　凡　茶外

三里来て何喰ませうや秋　栢莚
九人乃連下　女子七人　慶子
後架に払ふすれちすれちの　付　園枝
側て何物売紀こゑ　盛府
行灯哉君てふ字八川蘆時　里虹
鑿の冴くも云　舞雀
月ともて何洲も碎多波頭　雀童
粥乃膳ふも　蕎椒　新水
唐詩選用ゐよ日うらゝかり　山磧

年越解ケハ　横笛　喜長

花を雲をみるこころのまれと紅ゐ　家橘

水のつさこと　百　廉下　席文

雄こゝ　涙を年の丁　路考

吹ゐ　まし　住八ツ　花咲

酒を　こ　ねみ　桜

ね銭かゝせる　図画　隈

こゝろの銭離れて　公

橋私まも　比喜　長

手私を　這せて　橋よけ私も　幸

娶る　四年来　あゝの　傘　る　收

何所とゝくこゝのあゝまゝ続の声

鮒の　ゐ汁銭　蚤　蔭

日覚へ　尼の庁肌　雇

物売て　こゝ　馬　咲

何銭いふやゝ　杉　の　宿　如

借りてまる隣の　を毛ぬけて　又

[illegible]
[illegible]
[illegible]

席上漫吟途

祇園煙景對谿斜　白雪青山都錦繡
樹裡春風拂落霞　轉為金谷夕陽花

遊富岳

[illegible]

東海釣客

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

日暮亭萬臺

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

萬壽
秀谷
楚雲
塵甩

[illegible]
[illegible]
[illegible]

奉納

[illegible]
[illegible]
[illegible]

亀成
可容
来至

新玉乃宮居も遠く蘆の牙　存義
暑き日我も出へ神社思　平砂
みの笠や苅人林や花薄　祇巫
宮作や笹甲斐々々竹杖宮木　買明
柏掌我ても八重垣作る　湖十
鈴干や麦よりそふ村の新　吉原
日を重ね笠の行雲新しき　萬立
昏くとも芳野かくまの夏の雪　秀億

笠申ある弓張月や垣の隣　嘉廷
花始の伊勢や日ごの墨の一ツ　栖雀
隣をハきくとなせや花乃山　由林
乃のもるハそもよりの伊勢楊　田社
うら枯てうるよ楊乃宮柏　圖大
花笠や日をいさゝん山さゝら　露牙

あかるきよ天の戸明て岩ひらし　有佐

なる日ひ
とゝまり
表六章

人ゝ我松下漿
盛夏至涼
其ほとゝぎすの
名酒すゝむる
心のゝあるとも
やすゝゝ一
乃義連て

秀公
丹鳳
熊文
秀谷
丹鳳
熊文

時多

郭公　竹下　水竜　秀谷

郭公　竹下　一輪　杜宇　公

鬼貫ひとり

丹鳳

なくきすす　　馬九大納言光廣卿

芳野かくれねいくきこえいんきます

芳野かくれねいくきこえいんきます　荒木田守武

うきまきて新ふるかきねかな　宗鑑

ほとゝきすなれねいくきこえ　貞徳

郭公馬引むけよいくきこえ　芭蕉

月出雲寺寒山行くきます　素堂

闇ねやくきて人ハふなり　鬼貫

竹老て笋時のたくやおくきて　露沾子

履を竹てあまはりくもおくお夏　沾徳

杜宇地をはふ仙ゟ掃の人　專吟

片野ハ柳ちくむくきこえ　西丸

端物ゟ老てよくしやほうなす　越人

死ゟ事よ厠ゟくきこえ　仙霍

なくまく笑ふ須　赤右衛門妻

耳年今ある秋もおよりきぬ　立圃
郭公くくとよりて来人ありけり　調和
時鳥なきつる後のきぬぎぬに　和推
なくなくも急ぐ別れの先立ちて　和専
更行く秋の山里の村雨　青城
物のよるの一重衣さむくなりぬ　沾洲
更ぬ夜ひとりも二夜さむきかな　手素
挑灯の line 絵書く師走かな　杉風
なくなくも清き流れのおもかげを　荷兮

おもしき次郎の生れぬ梅の花　野坡

雪の朝の月ぞのこれる　大津智月

舎かるくみる記人ありまほろし　一二三

さそはれの多き節会や花の春　越女奥州

きえ死い我塚てきたる雪の朝　去来

ちるあき代官屋や洋燈ともしけん　安士

山焼の夜半の野守の声ぞ聞　芦本

なくまこと百八ありける　故一

訥干　常仙　霍公多
蝸名　風泉　杜鵑
栖風　拍船　聞之
露月　兀非　兀

望一　古　来川　百里　秋色　望一
沾涼　来川　百里　秋色

催歸 杜宇 杜主 蜀魂
周燕 陽雀 謝豹 思飯樂
蒼尾 黒羽 子宇 蜀鳥
蜀天子 古帝魂 綿蠻 勸人帰
玉迎鳥 佐久鳥 夜轡鳥 百舌鳥
鵙鳥 草雀 鳥哥鳥 橘鳥
無常鳥 田長鳥 童子鳥 罩鳥
鏡蓑鳥 五露鳥 買飽 望帝

杜鵑 子規 蜀魄 鶗鴂 悲鳥
不如帰 不如歸去 杜魂 蒼星
帝魂 鷓鴣 宇南鳥 啼血
似不聞 天津聞声 淫亂亡 族息中
郭公 早苗鳥 時鳥 勸農鳥
宇津田鳥 鬼津鳥 誰彼鳥 細鳥
妹脊鳥 脊直鳥 常詞鳥 皆乞鳥
言須鳥 喜帰鳥 別鶺鴒

右有拘增

よくあそび候間四季の折々
御出の節 気ままに御泊
被下候 御待申上候 景俊
悪場所の御通りハ御難儀 石腸
御手寺のまわりの あやめや
白鬼の戸田の うわ塚すゝき 千洗
富士やぬま 横うち 峠八ツ手 百太
かや 御むすび 御弁当 御茶 丁兵
宰府人の御通り 関やの御通り 趙波
宰府奉納 〃
〃

其角
〃

ちりくきそ多春の
六句独吟歌仙

俤廓

舟ゐる 姉ん 拿我加 〃
母中おもひ 〃
ちゝ多のくる 〃
多の中寒る母我か 〃
攀るくちくう 〃
我白人ちゝ次手 〃
蜀魂人我馳 〃

蓮谷

来至

五雲

百卉

鳳五

豊水

一麿

茶外

市栖

杜谷

菊狗

東中

亀成

芝光

おくき須日傘一支紙雲の上　総角
和ふもの　　鼠公
盃を洗ふをうぐひすや　　鳳理
傘もなくて射るおぼろかな　　水徳

閑さを人ごゝろ可る　　殘暁
ほとゝぎす称を鄭元ゆかり　　杜光

乳母ごゝろの行末や　　杜宇　　連袖
ついしらふ事もあり可る　　曙山
ちる桜残れハうらめしの人　　定花
名もなき筆紙第ふやうに　　扇子

同

小倉園春もあけぬを可る　　存義
新のうぐひす時ならぬ　　萬立
ひとつまつ書の唐えや可為　　秀億
おくまつ我家ハ雪と降ル　　嘉廷

春

雲やそらを詰うの声の　名　左龍子

ふめもむ夢とまるし梅川　敬人

菖餘八ふるまちの水茶屋　買弁

梅さくやまち学ぶの拾ひ　女玉江

梅咲て斗ふ手山行尤　十千

梅まねて字称う婦と教鳥櫛子　紀円

塔ふ竈へ新銭ふつて探うれ　万須

梅う寺や梅ふなの亭ふの鶯声　洞什

七ふふ手うり切寺ふ北淀蓼氏　冊鳳

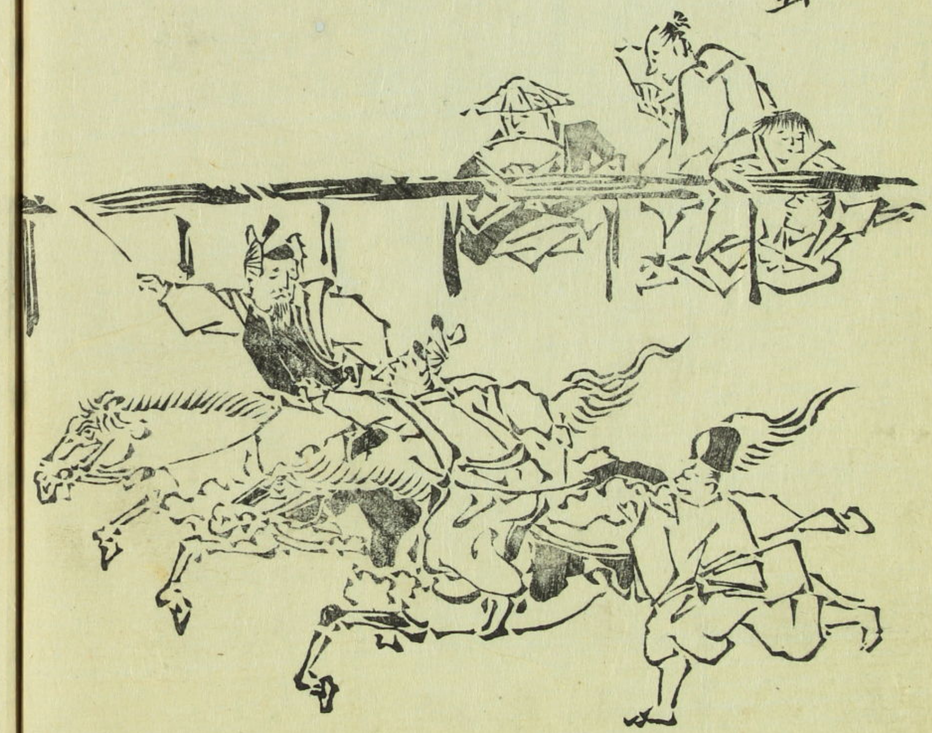
左龍子　超風

賈升　女玉江

元井　砂汀

東壁　鹿文

丹鳳



秋

二村ともなく夕の花　左龍子

蓼喜画

買弁
女玉江
官路
田且
魚風
敬人
篆砂
丹鳳

冬

埋火の灰白くとも左龍子

もろ共に土とまじるる時ぞ哀れ　買弁

冬籠もりの振向きもせぬ女　王江

新雪や八重垣しるき小屋一つ　田鳥

茅の穂の乱れて氷る朽舟　相重

花を摘む菊の如くに寒うなり　田岱

俯すも宜しきものを小女　抗糸

死後残る身の名となるぞ哀れ　秀谷

寒き夕妓の膝を狼引　丹鳳

ちふくの花ちりてやとろろ汁　六窓
一輪も日を浴びて　杜丹花　孟津
暁や　細める窓の夕すゞ　水路
ゆふべして雫ぬるる　杜丹哉　和山
山ざとや　古井をひくく蘆の妻　連舎
月代も二ちやうや　夕すゞみ　麗来
梅咲やとも酸くもある清書　秀谷
都なる女波男波や　川ぬし　隻若

新の世も清腰乃かゝる梅ぢ哉　雪羽
やうやうに染るあをきのも花や　紀貝
日ぐらしや陰ふかくまきれ込　廉文
学ぶ手や蓼をたゝく酢の汁　連尺
春ふかめ　ぬりし柳や　雨雲

ちぐさの新茶や　梅の茶　ちつる
うぐひすの　雨の雫や　民歌
迷子をと言ふて　岡八や　几巾　秀谷

去留

葛道

寛子

秀谷

道院

雷鳥

鬼雀

儲十

湖十

紀逸

珠来

吉門

栫尾

田社

古獨歩氏の氏もはなやかなり
なりもいでゝ其家名塚結
句残るうし氏結四時乃
あれ結ばせの色かれや
庵ゝ柏のゝ
あれハてゝ柏ゝ
ゝ拾遺一
ゝ年ゝ四季の
結ゝ

春

椀ふせおもてゝ
本飯ハもろゝゝて

彼岸 凡 超波

盛れ
ゝ

ゝ年の
譲雛ゝ
右啼ハ左ハ
兄ゝねゝ
ゝ年ゝ
さゝゝ
初午ゝ
多野ゝて
ゝゝゝ

雛 凡

肥前ゝ
ゝ
体む 塘ゝ
ゝ
雀ゝ啄く梅の
ゝゝゝ
ゝ
枯手剛れて山ゝ
ゝの新緑ゝ
ゝ
左様ゝや梅の
ゝ
汝平ゝ

腸押の会あり　八梅みな花
幕方なる体もありもの花盛
青漆の合羽もありて咲く梅代
初午や今宵とすいまもの灯
そこもとや十戔の墨おろすとも
猫が机精の腕や巻みより
泥亀が叫ぶより　踏石梅の雨

綻我多のまゝ又の雪へ手
着ものゝ裾をも穂又出る白茅代

指童が申我うちへ梅ありや
山吟の花ふけ今宵ふけ代
出ものゝ自慢の鍋会　花ちかし
白魚や十二篇ありの側
清ましや牛乳の梅此下
さくらとは筆我刻む女代

翠架井名改之賀

代々我ぬけてのゝ梅物

賣店ともかまへ
枯枝や綿の出かゝり
判とて布袋ハ宝ゟ
大内の朝
遠寄の篇て
汝手内や菜畑の角のみれ髪
おそろきもの
汝引て一の字
大坂や坂ハ先ゟ
むめの花

雛や爲ゟめの
父の恩類三枡屋助十良
笑て狂ひも
山なくて國乃
戻り

發

平戸の句也せめて
菜畑ゟの山門
傘持仕ゟの
五月雨

さみだれの降りぬ日なく署引
初松魚やとめし旅籠小判尤
義秀の殊更あつき線香かな
三圍の月ぞ一つや花の雲
面影の雲吹きとばす夏大根

平井聖天宮奉納

一筋の杉むら青き夏大根
幸崎色衰へまさり芒雨
ゆふぐれは誰が扉ぞ紅葉の唇

秋雨やつくねんと帆外紅
納書きものうん帆外紅
納書きものうん帆外紅
筆八角ぐむまでの誓尤
寺籠や梟くゝる夜や蝋牛
笠着て蛇手深の砌かな

大傳馬丁天王奉納

祇園會や赤子一名世ら投頭巾
醫栗店ぐらり春心尤

雨の塊魚うろ歩行列多
ゐる女ゞ先ひいでを喜ぶ玉
筆しさゝ一輪八いろくの品ぞ

人言柳葉比愁眉　水國追善

年月ゑや柳ふや　桜を須ろ矢
生まるまでて
乃ちせ乃ち前ゝ旅乾く鬼ゐ中
吹きふ千花乃多ゝ茨籠
降ゐ如日八ふれろ多有ル

祇園會ゞ朝ル色さく　ゐまて
擾擾咲ゃ己の本ふりを　箒立
早乙女ゞ　天窓の上我　臺所

道成寺を去る聴ま

日盛や　諸ろ百人会糸
雨さゝと牙ま小笹糸
多籠乃一温ふ　ふ素ル
三夕を画ける扇の
夏の夕雪駄ゐ叶ゐ前ル

さみだれのふるやまぢをゆくあゆの
きえてもとまるわがおもひかな
時鳥なく里の女毛むしり百合の花
ゆりてふきてふ百合の花

在女の賛又

川竹の今もかくれとものくと咲ぬ
おもふてふ五月雨や紋羽の蝶ハ鱗粉なき
通ひの頭巾にねの字のもれ

夕ぐれを吐出す杜丹花
四にしなをもたせてや杜若
捨ものやきれ学士ものの五つ子
虚無僧共一ぷく喫ん夏衆

秋

清僧共声ひくくなり月の前
星座て葬ひくく也
蚊の見舞ハなりなり

西行ハ弓矢とる身乍ら栗山子北
獨立て芭蕉庵を結ん
八朔や一骨まて白き三十町
何もかも不二の上這ふ大むろ

病中の吟

腎虚して天の川多菜ル
長病乃耳ゥ左くさる角力取
武藏野ハ関をもよし雲雀声
杉の奴吉右衛門殿

世の中乃食なつめて稗のお
八朔や あれの赤子も丈夫に
枝豆や 惚ゝ 惚ゝのかり衣

江口之能於画賛

川竹於もろ共のつら
白菊乃 於紙子於袖乃朱
釋迦如来 生れなから 毛頭取
刀豆の 於もられて踊りを
あきの海苔於汁や秋蛤

饌具を出し少神を饗し奉る事
川海老や陸より
うるかれて後
子ま
名月其象の
お供へ
蜂や
日拝の
鶏鳴や
名月や
孤ひ
日照て
八朔や
武家郎
実や
柿の
菊や
鶏鳴や

庵に杵つゝ家せて作ん神佛
生る日もあれば死る日もあかるく庵や一庵入
名月や柏うつ音よ宿二人
七夕やほろ〳〵ちりて揚る雲北常
名月やかゝちきん人の竹掛る
明〳〵てをのゝ声をのの間
相撲取名をよばれてまいりけり
稲妻や天の戸なれや遅々秋

我庵根もよそ作られて庵一天々川
鶯もものれうく我はし一柱

楊貴妃帰唐常思

名月や張るものまは繞立
萩萱もく折八白菊の庵りかな
名月や急ぬ柏折おもろ
新しきくの香をわるの首
海原や松もすくすくすりて小の
菊供花をの九日の夕九

冬

荒海へ船かる
蔓うち〳〵臍の
ちゝ〳〵乎飛
初雪や神笠の
対死乃妹八誠
喜之乃ち〳〵
むく犬狐
新堀へ

貞佐悼

師乃恩八彡世ゝかゝるを三年乃栗
百ヶ日 法ゝをゝれぬ旅の走ㇷ
同一周忌
雛僧の孤ゝまゝ 秋もくれ
同三回忌
みよもゝ前田踊乃ふる鞆
同七回忌
我ゝを師のかたみとや杜の鳥

富賀岩奉納

八雲ゝゝ塚八法るをゝく ㇷ
ゝるゝ世ゝ年月まて八ゝ島杉京
ゆ雪ゝゝの独ゝ乙年さりの
ゝ野の景ゝりてゝく水甲ㇷ
子おゝゝの加ゝゝと生て祖代ゝ
ゝるゝ世ゝ 四ゝ回ゝ号後者
神ゝき ゝ法世乃葉色整
ゆ雪ゝ脊中ゝゝゝゝんお前
法ゝ社月ゝまゝ八梢の天窓ㇷ

歳旦　春與歳暮

享保十三戊申

一刃柏現二年

兄よ餘　杉

己酉

元日や鶏

雪よ鶏比丘尼

庚戌

門松や

聲あらし

辛亥

面白

鯉賣や

壬子

芝浦や車の上の初雪

[illegible]

[illegible]

癸丑

春の水滑をんなを[illegible]

風ひまもる柳の[illegible]

[illegible]の宮川[illegible]

臘八や粥を仏をあかるむ

甲寅

[illegible]

山杜を[illegible]盤[illegible]

乙卯

喰[illegible]

橙を人[illegible]

丙辰

曙や我[illegible]

白[illegible]

丁巳

元旦や竹の子生る人の奥

嶺むし〳〵大卅日の泣きうめき

戊午

初夢や千里乃かなたより来の飯

柊をさすもおろかやあやとり升着る

己未

珊瑚珠を人の手元や去年の奥

福豆乃花くらしさや年の昏

庚申

四ツの成九ツの年なりけるの夏

ちかづきて女形乃ものと秋昏

己酉春奥前落

禅を汝子をまもりて若菜哉

湯島奉納

梅の枝や唐土まねの立姿

芝神明奉納

葉生姜や伊勢の須萩の雫

探題　大根引　頭巾雪　霜柱　鴨氷

二勝の百峰をや大根引　塵匣
世々中々義理をせ絆てゆく人　通車
水鏡氷々もあるよろみかな　律所
馬駈鈍き海よりくるゝ春　さゝめ
春秋さくら乃こゝろや霜柱　秀谷
降雪や声呵して馬士の唄　楚雲

降れ積る雪の垣　古　獨巷
浦自慢する家八重桜　女　皐月波
超々宝永の霜踏分て　仝
魚住川の水上、流獨
酒飯る家八重桜よ　仝
細水鏡　雪の糸卯波

歌仙

元日や　あくさ太郎　勿馬鴨子　超波
梅乃下　校手　後ふ　礼帳　秀谷
真乃雨　柳乃　梅乃根を　傘掛て　雲帳
を　奈利乃　ゆ　ゑ　仝
月独　秋　何　吟　ゑ　竹瓦
牡何れ　ゑ　ゑ　ゑ
　　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　秀谷

ゥ吹ハ　飛赤蜻　蛉　挨　仝
聲　金　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　竹瓦
乃乃　何　れ　ハ　服　の　減　ゑ　ゑ　雲帳
女　房　秋　当　ゑ　越　す　ゑ　ゑ　世　の　中　秀谷
思　へ　人　京　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　竹瓦
蚤　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　仝
沼　電　蒸　暑　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　秀谷
鶉　隣　の　網　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　雲帳
関　ゑ　ゑ　酒　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　ゑ　仝

[illegible]
庵未乃庵[illegible]
年前の[illegible]
何[ヨ]となく[illegible]
逃くて[illegible]
楠よ降[illegible]
[illegible]
四[illegible]
融明日八[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

竹尾
秀吾
雲悟
延泰
秀吾
雲悟
延泰
秀吾
雲悟
延泰

[illegible]
[illegible]
[illegible]
杉の尾[illegible]
病敵く[illegible]
引越へ[illegible]
尼[ウ]打[illegible]
砌の[illegible]
降くて[illegible]

雲悟
立
延泰
秀吾
雲悟
延泰
立
雲悟
秀吾

雲帳　十一句
秀谷　十句
庭臺　八句
竹瓦　六句

追加

軸

いつ秋の日張八かハる清水哉　平砂
返ふやいやといはれぬ人も　祇丞
多賀社もまつり清めん代　吉原
何ちこて茶をまいらせん　超雪
我何をもて待ふ此の清水　書永

水茶や歯ぬけ婆ゝの花菜　庭臺
水行を笑ふ人も　清泉
きもくの乃めり人ハ文衣　海如

同

魚釣て帰ると乃ぞん　有佐

大尾

世の神社人よ出清水哉　買明

寶暦七丁丑孟冬

本白銀町二丁目
近江屋藤兵衛

本石町壹丁目
龜屋太兵衛